

幸せな社会づくりをめざして

「超高齢社会」のこれから

超高齢社会とは、65歳以上の人口の割合が全人口の21%以上を占めている社会をいいます。日本は2010年に超高齢社会に突入しました。今後も高齢者の割合は高くなると予測されており、2025年には約30%に達するとみられています。

■超高齢社会の現状

超高齢社会においては、高齢者に関する問題が、より身近なものになってきました。

たとえば、一人暮らしで介護してかれる家族がいない高齢者や、高齢の夫婦のみの世帯、あるいは高齢の親のみの世帯など、高齢者が高齢者を介護する「老々介護」の世帯の割合が多くなっています。

一方で、日本の平均寿命が伸び続ける中、年を重ねても、就労や地域でのボランティアなど社会参加を通じて現役として活躍している人がたくさんいます。高齢者を一律に年齢で区切って「支えられる人」ととらえることは、活躍している人や活躍したいと思っっている人の誇りや尊厳を低下させ、個々多様な存在である高齢者の意欲や能力を活かすことの妨げになっていると考えられます。

■「超高齢社会」と私たち

地方でも、いわゆる「地域社会」が

失われつつあるといわれています。地域住民同士の絆が希薄化する中で、孤立していく人も増えていくことが考えられます。多様な高齢者の現状をふまえて、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域全体で支え合っていく必要があります。

■人権政策課

(☎23-5415)
(FAX 37-3184)



常設展Ⅱ 「よなご子ども凶鑑—米子市美術館の子どもたち—」より 笹鹿 彪 《小鳥屋》

米子出身の洋画家・笹鹿 彪 (1901-1977) が本作を描いた当時、日本は戦後の荒廃を引きずり、子どもを取り巻く環境は決して恵まれていませんでした。しかしこの画面からは、子どもたち、そして小さな生きものたちへの温かい眼差しが感じられます。穏やかな陽の光を背に、しゃがみこんで籠の中をのぞきこむ少女の後ろ姿からは、小鳥やウサギとおしゃべりする声が聞こえてきそうです。

笹鹿は、20歳のときに米子で開催した個展の挨拶のなかで、自作について「この可愛い私の小児を皆さんと一緒に愛し恵み共に発育させていただきたいと存じます」と述べており、まさに我が子のように作品を愛おしむ人柄の持ち主でした。店の奥と、右端に佇むもうひとりの女性の視線には、未来を生きていく子どもたちへの、作者の敬けんな祈りがこめられているのではないのでしょうか。

本作をはじめ、収蔵品の中から子どもをモチーフにした作品をご紹介します常設展Ⅱ「よなご子ども凶鑑—米子市美術館の子どもたち—」は、1月13日(日)から2月3日(日)までご鑑賞いただけます。

※大学生以下の方、70歳以上の方、障がいのある方(付添のかた1人を含む)は本展を無料でご覧いただけます。くわしくは「1月の催し」(P24-25)をご確認ください。

美術館通信



笹鹿彪《小鳥屋》1947年 油彩、カンヴァス

問合せ 米子市美術館 ☎34-2424、FAX 33-0679